

# 辟瘟扇考

—— 翬・便面の考察を中心として ——

## 一 はじめに

中國に残る様々な年中行事には、それぞれに特有の由來をもち、脈々と長い年月受け繼がれてきているものが多くある。しかしながら時代が下ると、もともとの意味合いが薄れ、形骸化して、行事に付託された意味合いが分からなくなって、その來歴も問わなくなってくるのも世の常かもしれない。五月五日の端午節に行われる行事の一つに扇の贈答というものがある。扇については日本での扇子のような折りたたみ式の形状のものが見られるようになるのは一般的に北宋以降のことだと考えられており、それ以前の文獻に出てくる扇を指す名稱も、實は様々である。名稱の違いによる指すべき扇の形状の違いも、判然とは區別がつかなくなっている様相を呈している。本稿では、唐

## 貝 塚 典 子

宋の頃までの扇を指す語を整理し、その中で特に翬と便面を取り上げて考察を加える。翬は周代の葬禮の器物であり、扇の類であると漢代以後の注釋家達に説明されている。また便面も漢代の墓中の畫像右に多く描かれている扇である。三世紀以降五月五日の端午節が確立し、年中行事の一つの要素として唐の頃には盛んに扇の贈答が行われるようになっていった背景を考察し、扇という器物に付與された原初的な要素を探ってみたい。

## 二 五月五日の贈答品としての扇

唐の太宗には、臣下の長孫無忌と楊師道に扇を下賜し、次のように語ったとされる話がある。

五日舊俗、必用服翬相賀。朕今各賜君飛白扇二枚、庶動清風、以增美德。〔唐會要〕卷三五書法

## 中國詩文論叢 第三十七集

と、「鸞・鳳」「蟠・龍」の文字を扇に飛白書で書き、「五日は昔からの風俗で身に付ける器物をもって互いに祝いをする。朕が扇を二枚與えるので、清風を起こして美德を増やせ。」と述べたという。ここで太宗が語った端午節の贈答の習慣とは、唐代には既に廣く行われていたもののようで、目上から目下に贈られるものとばかりは限らない。唐代に

高宗永徽三年五月己未制、禁斷五日進獻及更相贈遺。〔冊府元龜〕卷六三帝王部・發號令一

という禁令が出されており、目下から目上への進獻と同格者同士での贈遺が禁止されている。また、開元二十五年六月にも

五月五日、細碎雜物、五色絲算、竝宜禁斷。〔唐會要〕卷二九節日

と、こまごました小物や、五色の絲かごの贈答が禁じられている。これらの禁令は、裏を返せば贈收賄につながりかねない程、端午節には贈答の習慣が廣く浸透していたことを示している。

中でも端午節に扇を贈る記述は多く見られる。六朝の『宋書』卷四一に

元徽五年五月五日、太后賜帝玉柄毛扇。

と、明恭王皇后が帝に玉の柄の毛扇を贈ったことが記されている。そして唐代には、翰林學士が賜ったものとして、唐の李肇の『翰林志』に

端午、衣一副・金花銀器一事・百索一軸・青團鏤竹大扇一

柄・角褰三服・炒蜜。

とある。金製銀製の器に、長命縷とも呼ぶ五色の絲や角黍（ちまき）、砂糖と共に、竹製の大きな丸い扇が下賜されたことが記されている。また、北宋末には、

歲時雜記、鼓扇百索市、在潘樓下、麗景門外、闔闔門外、朱雀門内外、相國寺東廊外、睦親・廣親宅前、皆賣此物。

自五月初一日、富貴之家、多乘車萃買、以相饋遺。鼓皆小鼓、或懸于架、或置于座。或鑿鼓雷鼓、其制不一。又造小扇子、皆青黃赤白色、或繡成畫、或縷金或合色、製亦不同。又秦中歲時記云、端五前二日、東市謂之扇市、車馬於是特盛。〔陳元靚〕『歲時廣記』卷二十一「送鼓扇」

と書かれ、北宋開封では、扇を賣る市が五月一日より立っていたことが分かるのである。富貴の家の者が車に乗って買いに来て、互いに贈答しあう習慣があり、扇は様々な色のものや刺繡で繪を施したものなどもあったとある。

さて、この扇の市がたつ五月のはじめ、端午については『藝文類聚』卷四歲時中・五月五日に、

風土記曰、仲夏端五、烹鷺、角黍。端始也。謂五月初五日也。

と書かれ、『初學記』卷四歲時部・五月五日第七敘事にも

周處風土記曰、仲夏端午、烹鷺、角黍。注云、端始也。謂五月五日。

と書かれている。同様の記述は『太平御覽』卷三一時序部・五月五日にも以下のようにある。

風土記曰、仲夏端五、端初也。俗重五日、與夏至同。

そもそも舊暦の五月は氣溫が上昇し、高温多湿で細菌が繁殖し、食中毒や疫病が流行しやすくなる時期であるため、

五月俗稱惡月、多禁。『荊楚歲時記』

と、五月は惡月であると認識されていた。また、夏至は一年の中で最も日の長い日であるが、これを境に日は短くなり始めるため、夏至は陰陽の分かれる境界の時として認識されていた。

後に夏至の惡疫祓いの諸行事は、端午の節日が三世紀中葉に成立すると、端午に移行するようになる。そのため、五月五日には梟の羹を食べる習慣や、角黍を食べたり、

五月五日、荊楚人並有躡百草、將艾以爲人、懸門戶上、以禳毒氣。『太平御覽』卷三一時序部・五月五日所引の『荊楚歲時記』

と、艾（よもぎ）を採り人の形を作り、毒氣を祓う習慣が行われた。他にも、屈原との関わりで説明されることもある競渡も、五月五日の行事である。また中國南方でよく語られる呪術の一つである蠱毒の傳承も、材料である様々な蟲を集める日は五月五日とされている。これらの行事が、いずれも夏のはじめの、特に高温多湿の南方において疫病等の災いを忌む辟邪の意圖で行われていたものであることは、以前に拙稿で論じた所である。

# 辟瘟扇考（貝塚）

それによれば、特に競渡は、タイ等の南方の習俗との関わりが認められた。また蠱については、長江流域で漢代から罹患の確認できる感染症である所の日本住血吸蟲症との関わりが考えられた。

では、上述の如く夏季に関わる習俗に記載される様々な器物の中で、あらためてここで扇について考えてみたい。宋代には扇の市がたつ程の盛行をみるが、唐代にも既に五月五日の贈答の様々な器物の一つとして、廣く扇が贈られていた。このことからすると、夏の暑さに涼をとるのにふさわしいものとして扇が好まれていたことが想像できる。ただ、先述の『唐會要』卷二九節日や『翰林志』では、扇と共に挙げられている贈遺品には五色絲算や百索がある。これは『太平御覽』卷三一時序部の五月五日に、

風俗通曰、五月五日、以五彩絲繫臂者、辟兵及鬼、令人不病瘟。

と書かれ、『後漢書』禮儀志・中にも

漢兼用之、故以五月五日、朱索五色印爲門戶飾、以難止惡氣。

と記載される所の、臂にかけ魔よけにする五色の絲のことである。別名朱索・長命縷・續命縷・五色絲ともいわれるものである。五色絲は扇と同様に五月五日に好んで贈遺される品であり、魔よけの中でも特に、『太平御覽』の「人をして瘟（はや

り病)を病ましめず、『後漢書』の「以って惡氣を難止す」とあるように、夏の暑さから生じる災厄の中でも流行病を阻止する意圖をこめて贈られるものである。

同様に扇についても唐代の『雲仙雜記』卷一洛陽歲節には端午、朮羹艾酒。以花絲樓閣挿髻。贈遺辟瘟扇。

とある。五月五日に、もちあわで作った羹やよもぎ酒を作り、美しいあやぎぬで作った樓閣の形をした髪飾りを髪に挿して、辟瘟扇を贈るという。辟瘟扇とは瘟(はやり病)をさける效能のある扇という意味である。夏に考えられる災厄の中でも特に流行病を避ける意味合いをこめて扇が贈遺されていることが推察できる。夏には水害やまた日照りなどの天災と共に、食中毒などの體を害する災いが考えられるところであろうが、中でも流行病を防ぐことが期待されて扇に呼稱がつけられている。ここから、特に夏の流行病が重大な關心事の一つであったことが窺える。様々な感染症が高溫多濕な氣候の中で力を増し、害惡を及ぼすことが危惧される時に、扇に藥效、治癒力を求めるかのような呼稱がなされている。これは、扇が單に暑さをしのぐためだけに使われる器物ではないということを示している。扇にいかにして、はやり病を避ける效能が期待されるようになってたのかを考えるため、扇のもつ原初的なイメージを次に探ってみたい。

### 三 扇の異稱

扇は、古來より多くの文獻に記されているものであるが、その呼稱は實に様々でその指し示すものも同一ではないように思われる。まず、『春秋繁露』の同類相動には暑さをしのぐものとして以下のように説明されている。

物故以類相召也。故以龍致雨、以扇逐暑、軍之所處以棘楚。そして材質については、『太平御覽』卷七〇二服用・扇には、西京雜記曰、天子夏則設羽扇、冬則設綰扇。

と、動物の羽や絹で作られた扇が登場する。

また、扇の別稱として『方言』第五には以下のようにある。

扇、自關而東謂之箒、自關而西謂之扇。

『釋名』釋喪制にも

翬、齊人謂扇爲翬、此似之也、象翬扇爲清涼也。

とあり、箒・翬・扇の名稱が、地域による呼稱の違いによるもので同一のものを指すことが記されている。『說文解字』五編上・竹部にも以下のように箒は扇の異稱と書かれている。

箒、扇也。從竹走聲。

以下、夏に重寶され冬に忘れられ打ち捨てられる存在として語られる内容からも、箒・翬・扇がほぼ同じものであると認識されていたことが確認できる。

人夏月操箒、須手搖之、然後生風。(『論衡』是應)



如冬日之扇、夏日之裘、無用于己、萬物變爲塵埃矣。〔文子〕上禮)

中夏用簞、快之、至冬而不知去。褰衣涉水、至陵而不知下、未可以應變。〔淮南子〕說林訓)

夫夏日之不被裘者、非愛之也、燠有餘於身也。冬日之不用翬者、非簡之也、清有餘於適也。〔淮南子〕俶眞訓)

更に、現在のおうぎ形の折りたたみ可能な所謂扇子は、一般的に日本から宋代に中國に輸入されたものであると考えられているが、その根據となっている記述には以下のようなものがある。宋の江少虞の『宋朝事實類苑』卷六〇風俗雜志・日本扇に北宋の開封の相國寺門前市で日本扇を賣っていたとされる。

熙寧末、餘遊相國寺、見賣日本國扇者。琴漆柄、以鷄青紙厚如餅。擘爲旋風羽。淡粉畫平遠山水、薄傳以五彩、近岸爲寒蘆衰蓼、鷗鷺佇立、景物如八九月間。艤小舟、漁人披蓑釣其上。天末隱隱、有微雲飛鳥之狀。意思深遠、筆勢精妙、中國之善畫者、或不能也。

とある。しかし一方では明の『平妖傳』四十回本の第十一回は、

那時摺疊扇還未興、舖中賣的是五般扇子。那五般是紙絹團扇、黑白羽扇、細篾兜扇、蒲扇、蕉扇。

と書かれ、ここではまだ物語の舞臺となる北宋の頃に折りたたみ式の扇子は扇舗に賣られていなかったとされている。

#### 辟瘟扇考 (貝塚)

そしてはっきりと折りたたみ式扇が日本扇であると示す記述が明の陳霆の『兩山墨談』である。

宋元以前、中國未有摺扇之製。元初、東南夷使者持聚頭扇、當時譏笑之。我朝永樂初、始有持者、然特僕隸、下人用以便事人焉耳。至倭國以充貢、朝廷以徧賜羣臣、內府又倣其制以供賜豫、于是天下遂通用之、而古團扇則惟江南之婦人猶存其舊、今持者亦鮮矣。

これによれば、宋元以前には中國には折りたたみ式の扇子は存在していなかったことになる。だが一方で、『樂府詩集』四十四卷子夜四時歌の「夏歌二十首」の第五首目に

疊扇放牀上、企想遠風來。輕袖拂華妝、窈窕登高臺

という晋代の歌も見られる。既に六朝期には折りたたみ式の扇が存在していた可能性もあるかと思われる。扇の名稱ごとに具體的に指し示す形状が知りたところである。

また、別には便面も扇と同じものとして挙げられる。『漢書』張敞傳に、

然敞無威儀、時罷朝會、過走馬章臺街、使御史驅、自以便面拊馬。

とあり、自ら持っていた便面で馬を打ったという。顔師古の注には以下のように書かれている。

便面所以障面、蓋扇之類也。不欲見人、以此自障面則得其便、故曰便面、亦曰屏面。今之沙門所持竹扇、上表平而下

## 圖、即古之便面也。

ここで、便面とは、扇と同じく顔の前に置き、表情があらわに見られることを遮る用途のものである。竹でできており、形状は上が廣く平らであり、下はまるいとされている。便面は、おおぎ、風をゆらして涼をとる用途以外に、顔をかくす目的で用いられ、その意味でまた屏面という呼び名も同じであるという。屏面については、同じく『漢書』卷九十九中の王莽傳の後常翳雲母屏面、非親近莫得見也。<sup>(8)</sup>に、顔師古が以下のように注をつけている。

屏面即使面、蓋扇之類也。

元來、名稱が異なるということは、その指し示すものが別のものであることを意味すると思われる。ただ、地域間の交流や時代の變化の中で、似た形状や用途のものを混同し、もともと意味していた事物ではない、別のものを指し示す言葉として使われていくことが多くあったであろうことは想像できる。そのため、簞・翳・扇・便面・屏面の違いを論じることにはなかなか難しく、その指し示すものの差異があまり判然としていない現状があるように思う。ただその中で、翳と便面については特色ある記述が多く確認できたので、以下に検討を加えていきたい。

## 四 便面の形状と效用

先述の『漢書』張敞傳では、便面は竹製で、上が廣く平らで

あり、下はまるいとされていた。<sup>(9)</sup> 具体的な形状がよくつかめない中ではあるが、漢書の記述のように官吏が扇のようなものを手を持つ畫像石を見ることができ(圖①)。これと同様の菜切り包丁のような形をした柄のついた竹製の扇の實物が湖北省江陵馬山の一號楚墓から出土している。大變保存状態のよい形で残されており(圖②)、また、官吏が扇のようなものを手に持つ俑が一九五八年湖南省長沙市金盆嶺九號墓より出土し、湖南省博物館に收藏されているという(圖③)。

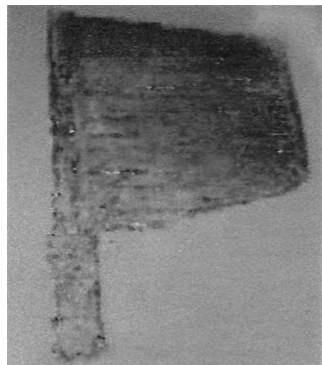
この菜切り包丁形の扇を持つ人物像は、漢代墓中の畫像石の中に豊かな神話の世界の人物畫等と共に、多數見られるのである。多くの研究者がこれを、便面を手執る圖として説明している。例えば、貴人をあおぐ侍者の姿(圖④)、また車列の車馬の前で便面を手持ち先導する従者の圖もある(圖⑤・圖⑥)。



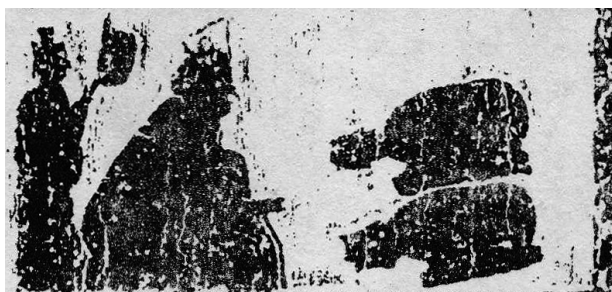
圖① 山東省沂南漢墓博物館編  
『山東沂南漢墓畫像石』齊魯  
出版 二〇〇一年一月 七十七頁 圖七十一 後室南側隔  
牆西面畫像



圖③ 圖②に同じ。



圖② 「光明日報」二〇一二年三月七日「雅趣」隴菲「漫議“便面”——兼談文物圖像命名」



圖④ 朱錫祿編著『武氏祠漢畫像石』山東美術出版社 一九八六年十二月 九十五頁 圖百五 西子闕闕身北面畫像 第二層拜謁



圖⑤ 江蘇省文物管理委員會編著『江蘇徐州漢畫像石』科學出版社 一九五九年八月 圖六十八 銅山縣安樂村地區的畫像石

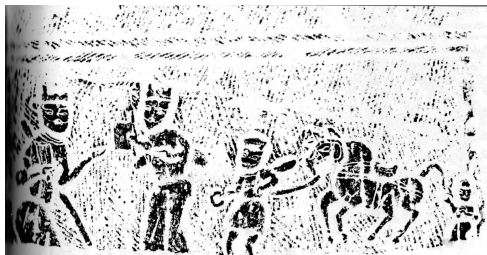
そして便面を手には舞う圖（左列の下から二人目）（圖⑦）に、更には異形の假面をかぶり斧のようにも見える便面を振りかざして舞い踊る圖がある（圖⑧）。また客人を迎える主人が便面を手を持つ圖（圖⑨）、更に宴會の場面の煮たきの際に火をおこして料理を作る従者の圖（圖⑩）など、出土した場所も各様

であるにも関わらず漢代の畫像石には便面を持つ人物像が多く描かれている。このような場面での便面の使われ方を見ると、單に暑さをしのぐために風をおおぎ、涼をとるという目的の外にも、便面は季節に關わらず日常的に用いられていたものであることがわかる。まず車列の車馬の先導をする従者が持つ便面は、いかにも象徴的である。露拂いをし、これから車馬の通行する道を開けさせるた

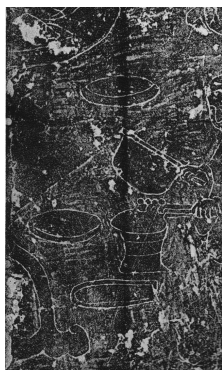


圖⑥ 土居淑子『古代中國の畫象石』同朋舎 一九八六年六月 圖百十六 函谷關畫像

圖⑦ 山東省沂南漢墓博物館編『山東沂南漢墓畫像石』齊魯出版 二〇〇一年一月 三十五頁  
圖二十三 前室八角柱樞斗和柱身東面畫像



圖⑨ 高文編『四川漢代畫像石』巴蜀書社 一九八七年二月 六十三頁 圖十四 宜賓石棺迎客圖



圖⑩ 北京魯迅博物館・上海魯迅紀念館編『魯迅藏漢畫象(二)』上海人民美術出版社 一九九九年六月 圖十三 山東漢畫像、金鄉朱鮪石畫像



圖⑧ 山東省沂南漢墓博物館編『山東沂南漢墓畫像石』齊魯出版 二〇〇一年一月 九十五頁「豹戲」

めの視覚的な効果がある。その上で、便面であ  
おぎ拂うものは、目に見える蟲の類やほこりや  
暑氣はもちろんのこと、目には見えない惡氣や  
よどんだ空氣や、はやり病のもとになる病原菌  
などの邪氣全般をも祓って道中を清めていく意  
味合いがあったとは考えられないであろうか。  
また、客人を迎える主人が手に持つ便面は、  
『漢書』の顔師古の注にあるように、顔の表情  
をあらわに見せない意味以外にも、車列の先導  
と同様に、客人を迎え入れる際の惡氣を祓う意  
圖も読み取ることが可能であろう。





圖① 鄭州市博物館張秀清・張松林編著『鄭州漢畫像磚』河南美術出版社 一九八八年九月百三十四頁 翹袖折腰舞

更に、舞い踊る舞人が所持する便面は、舞の體の動きと共に搖れて空気を攪拌する。後世の舞踊に扇が様々に多用される原型がここに既に描かれている。他の畫像石に長い袖をはためかせ踊る舞の圖（圖⑪）もあるが、元來衣をふる行為というものは、『禮記』喪大禮では、死者の魂をよびよせるほどの靈力を持つものであった。

復者朝服。（中略）皆升自東榮、中屋履危、北面三號。卷衣投於前、司服受之。降自西北榮。

とあるように、死者の體からぬけ出て浮遊している魂を、死者

の衣をふり、名を呼ぶことによって再び呼びよせ、ひきとめようとするのである。衣をはためかせ空気を攪拌させる舞踊は、娛樂であると同時に目には見えない鬼神と交信をする手だてでもある。便面をふりかざして舞う情景は、單なる娛樂ではなく、特に圖⑧の如く異形の假面をつけて踊ることも見られるのであるから、邪氣を祓う呪術的な靈力を高める道具として便面が機能しているときえいえるものであらう。

また單なる煮たきの場面に見える火をおこしている便面の圖についても、深津胤房「古代中國人の思想と生活」に指摘する如く<sup>(10)</sup>、煮たきの際の香りによる辟邪というふうに思いをいたすと、實はことさらに風をたてることに意味があるように考えられる。『禮記』玉藻には、

膳於君、有葷・桃・菊。於大夫去菊、於士去葷。皆造於膳宰。

と、しょうがやねぎやにんじくのような香りが強く辛い葷（なまぐさ）を好んで食べることが書かれ、鄭玄の注には以下のようにある

膳美食也。葷・桃・菊、辟凶邪也。

香りの強いものが惡氣を祓うというのである。同様に『論語』郷黨にも孔子の食生活について

沽酒・市脯不食。不撤薑食。不多食。

とある。薑（しょうが）を食べることについて朱熹の注では以

下のように、けがれたものや悪いものを祓うことができるという。

薑、通神明、去穢惡。故不撤。

この體內に香りの強いものを取り入れることにより、體からけがれや悪いものを祓う效用を考えると、便面によって調理過程の煮たきの風がたち、食べ物の香りが周りに擴散されることに、香りによる辟邪という原初の呪術的な意味合いを考えると、香りによる辟邪という原初の呪術的な意味合いを考えると、とも可能であるかと思われる。

唐の韓鄂の『四時纂要』五月に引用する『荊楚歲時記』には、

歲時記云、午日、以線線五色造長命縷、繫臂上、辟兵。又

以艾蒜爲人、安門上、辟瘟。

と、五月五日によもぎやにんにくを使って人の形を作り、門の上において流行病を防ぐ、とある。匂いの強いものには魔よけの意味があるのであり、特にやはり病を退散させる效能があるとされている。五月五日には

以菖蒲或縷或屑、以泛酒。〔荊楚歲時記〕

と、芳香のある菖蒲の葉や根を細かくして菖蒲酒に用いることが知られているが、燃やすと惡臭を放つ雄黃も、明代には酒に用いられることが盛んになった。<sup>(1)</sup>雄黃酒は大人が飲むだけでなく、

清の『帝京歲時紀勝』には、

飲餘則塗抹兒童面頰耳鼻並揮灑床帳間。以避蟲毒。

とある。子供の顔の、耳や鼻などの粘膜にぬったり、寢室にふ

りまいて蟲の毒を防ぐとされている。これは現在、ダニやゴキブリなどの害蟲除けにミントの香りの防蟲劑を居室に置いてみる發想と同様の、香りによる辟邪である。香りの強いものを身につけたり、飲食によって體內に攝取し汗や會話の際の體臭として發散すること、あるいは煮たきの際に風をあおいで匂いをたてることは、いずれも香氣によって疫病や害蟲を退散させ、邪氣を祓う效能を帯びた行爲である。

漢代畫像石に見られた便面を持つ圖からは、いずれも風をおおぎ、害惡や邪氣を遠ざける、うち拂う仕草が想い起こされた。一方、長い袖をはためかせて踊る仕草は、先述の『禮記』喪禮の招魂の記述のように、拂う意味よりも招く仕草に近いものかもしれない。邪氣を祓うのであれば、身につけた衣服の一部である袖で行うよりも、器物として身から切り離されている便面で行う方が、道理にかなうように感じられる。邪氣を袖に付着させることは避けたい心情が想像できるからである。

このように便面は、漢代の畫像石の圖像等から、邪氣をうち祓う意味あいを持つものに捉えられるところである。では次に翹とよばれる扇の意味についても検討をしてみたい。

## 五 翹の形状と效用

まず、翹は周代には葬禮の際の旗指物であったという。『禮記』明堂位に

有虞氏之綏、夏后氏之綢練、殷之崇牙、周之璧翬。

と書かれ、これに鄭玄が注して

周禮・大喪、葬、巾車執蓋、從車持旌。御僕持翬。旌從遣車、翬夾柩路、左右前後。天子八翬、皆戴璧垂羽。諸侯六翬、皆戴圭。大夫四翬。士三翬、皆戴綵。

と言い、更にこれに孔穎達の正義では以下のように言う。

周之璧翬者、謂周代以物爲翬、翬上戴之以璧。陳之而郭柩車。蓋從車持旌、御僕持翬者、證明葬有旌旗及翬之義。

つまり、周代においては身分によって、翬の数は定められており、葬列の車に下僕が翬を持ち付き従う。翬で柩の行く道を左右前後にとりかこみ、随行するのである。翬の上には璧をもつて飾りとし、そのため「璧翬」とも表現され、下には羽を垂らす。翬は葬禮における旗指物であるという。同様の記述は、『禮記』禮器にもある。

天子崩、七月而葬。五重八翬。諸侯五月而葬、三重六翬。

大夫三月而葬、再重四翬。

また、『左傳』襄公二十五年にも

崔氏側莊公于北郭、丁亥葬諸士孫之里。四翬不蹕。下車七乘、不以兵甲。

と書かれている。

そしてその材質について『説文』には

翬、棺羽飾也。天子八、諸侯六、大夫四、士二。下垂。從

辟廬扇考（貝塚）

羽、妾聲。

とされ、羽の飾りであり、下に垂らすとある。また別には、『淮南子』汜論訓では

殷人用櫛、周人牆置翬、此葬之不同者也。

とあり、高誘の注には以下のようにある。

周人兼用棺櫛、故牆設翬、狀如今要扇、畫文、插置棺車箱以爲飾。多少之差、各從其爵命之數也。

この『淮南子』によると、翬は葬禮の旗指物として墓室に柩と共に持ち込まれた後、壁にたてかけて設置される様は要扇のようであるという。要扇は、第三節で折りたたみ式扇について述べた際の注記にある如く、折りたたみ式の扇をさすものであるかと思われる。また、先述の『漢書』張敞傳の顔師古の注に便面は屏面をさすともあり、漢代では屏風も墓中から多く出土する。ここに言う翬は、墓室にたてかけて置かれる様が屏風と似ているというのであろうか。また、『周禮』夏官・御僕の「大喪持翬」の賈公彦の疏には、

漢禮、翬以木爲筐、廣三尺、高二尺四寸、方兩角高片、以白布畫雲氣、其餘各其象。柄長五尺、車行使人持而從、既窆樹於壙中。檀弓曰、周人置翬是也。

と書かれている。この賈公彦の疏に従えば、翬は漢代の禮でいう木製の筐（はこ）のことであり、布に繪が描かれているものでおおい、墓中にたてかけて置かれるという。『禮記』喪大記



の

畫翬二皆戴綬。

の孔穎達の疏でも以下のように、翬は扇の形状で木製だと説明されている。

翬形似扇、以木爲之。

このように、翬は『説文』では羽飾りであるとされ、『禮記』明堂位で孔穎達は、璧を載せ羽を垂らし飾るものとし、『周禮』夏官・御僕の賈公彦の疏では木製のはこで、『禮記』喪大記の孔穎達は木製の扇だという。

更に周代の墓中からは、銅翬と思われる器物が多数出土しているという。張天恩は「周代棺飾與銅翬淺識」<sup>(12)</sup>の中で、信陽楚墓M1の遺冊に、

一長羽翬、一徑翬、二竹翬。

という記載があることから、翬には禽の羽や竹や木などの材質のものがあつたが、保存されていないだけであり、西周中期以降に銅翬がよく見られるようになったと述べている。實際、一九五九年出土の上村嶺虢國墓地M二一九や、二〇〇七年出土の陝西省韓城梁帶村芮國墓地M五〇二の銅翬には、持ち手の木の柄がついているという。そして銅翬の形状については、芮國墓地出土の銅翬について

各墓銅翬的形制雖有不同、但翬體上部的中間有一圭形銅件、兩側有對稱飾件、整體呈三叉(齒)狀的特征還是比較一致的、

與其他地區周代墓葬的銅翬形制類似。

と述べ、中央上部がとがつた形で兩側には對稱に飾りがあるという。また別に、一九七九年に河北省平山縣の戰國時期の中山王の墓から銅翬が出土した際にも、それは當初單に山字形の器物と報告され、銅翬とは見なされていなかったという。同様に、天馬一曲村遺跡北趙晉侯墓地M九三から出土した翬も、北京大學考古學系・山西省考古研究所が「天馬一曲村遺跡北趙晉侯墓地第五次發掘」を『文物』一九九五年七期で報告した際にも、當初は長方形の銅片と石戈が出土したと述べられていたという。しかし、この長方形の銅片と石戈についても張天恩は銅翬であると判斷している。<sup>(13)</sup>寫眞が載せられていないため、具體的な形状は明確ではないが、周代の墓中から出土した銅翬は、現存する記述には見られない銅製の翬の存在を我々にはっきりと教えてくれるものである。

以上、翬については漢代の記述や周代の墓の考古資料を検討したところ、周代には葬禮の旗指物を示す語であつたことが分かる。材質は木・竹・羽・銅と様々であるにせよ、周代では葬禮の際に柩を墓室へ運ぶ道中に、柩を覆い隠す役目をする儀禮的な器物であつたことがいえるであろう。そして、柩と共に運び込まれた墓中においては、張天恩も

放置于椁內的外棺頂上、或樹、倚于棺旁。

と言う如く、柩の上部に置かれたり、柩の傍らに立てて置かれ

たり立てかけたりするのである。葬禮で用いられる翬は、墓室への道中では、柩をむき出しにせず、遮斷し覆い隠すものであり、そこには忌むべき屍と生者とを隔てる意圖があるうかと考えられる。更に翬を持つ従者が柩の周りを圍むことにより意義を整え、使者を粗末には扱わないという意志も視覺的に明確に示すことができるはずである。

先述の『禮記』明堂位の璧翬については、魯瑞青が「馬王堆一號墓與砂子塘墓葬具之『璧翬』圖像研究」で、「璧翬」の語は「避煞」と音通であるからと、翬に璧を飾ることによる辟邪の意味を述べている。<sup>(15)</sup>確かに璧翬には文字のみならず、實際の葬禮の道中において、歩みと共にその涼やかな音色が響きわたり、士大夫の佩玉のような音による辟邪の効果も確實にあったはずである。また周代の墓から出土した銅翬も同様に、葬禮の進む列に、澄んだ音を鳴り響かせ、空氣をふるわせ邪氣を祓い、辟邪の役目を果たしたに違いない。

翬は第二節で挙げたように、漢代の文獻では既に扇、箑とほぼ同じ意味で用いられ、特に葬禮の器物に限らず、廣く扇の異稱として認識されていたことが分かっている。<sup>(16)</sup>しかしながら、周代の禮制では葬禮の器物を指すものとして用いられ、特に死者と生者を分け、遮斷すると同時に、璧翬や銅翬を用いた場合にはその觸れてぶつかり鳴らす澄んだ音色が葬禮の邪氣を祓う效用もあったことが考えられた。漢代以後、翬が廣義の扇をさ

す語として用いられるようになってからも、もともとの翬のもつ儀禮の場での靈力、中でも辟邪の效力を有する所は、その根底に引き繼がれていたであろうと考えられる。

## 六 おわりに

扇の別稱には、箑・翬・便面・屏面などが挙げられるが、時代や地域によりその名の指す具體的な形状や材質の認識には、差異のあるところである。異なる名稱が同様のものを指していると考えられる記述もあれば、同じ名稱のものが時代によって用途や形状が異なるものに變化していることもある。

その中で、便面は漢代の畫像石の中では菜切り包丁のような形をして、地域による造形の違いを見せずに同一の形状で多數描かれている所であり、畫像石の中でどのような描かれ方をしているかを考察することで、その用途、便面に付與されているイメージを探ることができた。

例えば、車列を先導する従者たちが便面を手を持つ様は露拂いをしていようであり、目に見える蟲の類やほこりを拂う意味もあるが、更によんだ空氣や病原菌などの邪氣全般をも祓い清める仕草のように思われた。また主人が客人を迎える圖でも主人の手には便面が握られており、時には顔の表情を隠す遮蔽の用途にも使える所ではあるが、車列の先導と同様に、客人を迎える場の惡氣を祓う效能も感じとれるところである。

他にも舞い踊る舞人の手にも便面が握られ、舞の動きと共に空気を攪拌する様子は、特に異形の假面をつけて踊る呪術的な場面においては、場を清める効果を持つ道具として便面が機能していることが考えられた。そして、煮たきの場面でも便面を使い火をおこし風を立てている様が描かれているのは、便面が實用性を持った道具として使われていた面もありながら、香りをことさらにたてるところにも意味があるように思われた。しょうがやねぎやんにくのような香りの強い草（なまぐさ）を好んで食べることで、その香りにより悪気を祓うことができるという考え方からすると、香りによる辟邪の效能を意圖して風をたてる呪術的な意味合いがそこに付與されていると考えられる。便面はこのように悪気を祓い、時には香りをたてて疫病や害蟲を退散させる辟邪の呪術的な效用が見出せるものであると考えられた。

また、髻とは、周代には葬禮の旗指物を意味していたことが漢代の文獻や周代の墓から分かる所であるが、墓室への道中で柩を遮蔽し、覆い隠し、生者と死者を分かちつという髻が擔っていた用途こそ、扇全般の持つ最も本質的な用途の一つであろう。更に、髻髻のように髻に髻を飾ったものや、銅髻のように銅で作られたものは、葬禮の際に、涼やかな清めの音色も響き渡らせたに違いない。便面の香りによる辟邪と同様に、髻には音による辟邪の效用もあると考えられる。

ここであらためて五月五日の端午節に、扇を贈答する習慣について考えてみるに、第二節で述べた如く北宋では扇を賣る市がたち、唐代でもその贈答をめぐる記述が多く見られる所であった。舊暦の五月は高温多湿で食中毒や疫病が流行しやすくなる時期で惡月であると認識されている。特に端午節に贈答される扇を辟瘟扇とよぶように、この時期の扇は夏の暑さから生じる災厄の中でも、はやり病を阻止する意圖をこめて贈られるものである。單にあおげば涼しいという効果にとどまらない呪術的な意味をこめて辟瘟扇とよばれているのは、周代の髻や漢代の便面が持っていた辟邪の意味合いを扇が脈々と受け継いできているからではないだろうか。髻は生者と死者を分かち、遮蔽する。更には清らかな音色を立てることで士大夫の佩玉のように邪気をうち祓う效能も持つことができた。便面はあおぐことで場を祓い清め、また香りをたてる場合には穢れや悪気をも祓う効果もある。辟瘟扇は、單なる涼をとる道具ではなく、呪術的な意味合いを持ってその靈力を頼みに縁起物として好まれていたからこそ、端午節の贈答品としてもはやされていたのではないかと考えられる。

# 【注】

(1) 太宗は王羲之を好み、飛白書を得意とした。飛白書とは筆の運びを飛ぶようにし、かすれて書かれた高いデザイン

性をもつもので、漢末には成熟した形式を成していた。(全容範「古今飛白書に關する一考察―用筆を中心に」『デザイン理論』五十、二〇〇七年 意匠學會誌編集委員會)

- (2) 中村裕一『中國古代の年中行事 第二冊 夏』汲古書院、二〇〇九年十月

- (3) 注2に同じ。

- (4) 『隋書』卷三二地理志下で、揚州について述べた所に以下のようにある。

然此數郡、往往畜蠱、而宜春偏甚。其法、以五月五日聚百種蟲、大者至蛇、小者至蠶、合置器中、令自相啖、餘一種存者留之。

- (5) 拙稿「鴟夷革囊考―伍子胥との關わりにおいて」『國學院雜誌』第九七卷第十一號、一九九六年十一月／拙稿「蠱の諸相―日本住血吸蟲症との關連において」『中國古籍文化研究 稻畑耕一郎教授退休記念論集』早稻田大學中國古籍文化研究所編、東方書店、二〇一八年三月

- (6) 中村喬『中國の年中行事』平凡社、一九八八年一月

- (7) 王功龍・梁萍「中國扇子的起源及其功用」『中國俗文化研究』二〇〇五年、第三輯では、晉の張敞の「東官舊事」や晉の陸雲の「與平原君書」や『南齊書』の劉祥傳を引いて「腰扇」または「要扇」が折りたたみ式扇を指すとして、六朝期には中國にも折りたたみ式扇が存在していたことを述べている。

- (8) 屏面が便面と同じものをさすのではないとする異論もあ  
辟瘟扇考(貝塚)

る。夏曉偉「漢代便面功用小考」『東南文化』二〇〇三年第十一期では、王莽傳では、朝堂で體全體をかくす意圖で屏面は使われており、屏風に近い用途であるはずだとして、漢代の墓中に多く屏風が發掘されていることを擧げている。

- (9) 曹植の「九華扇賦」の序に

昔吾先君常侍、得幸漢桓帝、賜方扇。不方不圓、其中結成文、名曰九華。

と書かれ、その辭にも

方不應矩、圓不中規。隨皓腕以徐轉、發惠風之寒微。時氣清以方厲、紛飄動兮紈綺。

と記される扇は、便面であるとは書かれていないが、その形状は特徴のあるものである。「不方不圓」は四角くもまるくもなく、「方不應矩、圓不中規」は四角くとも直角ではなく、まるみをおびていても圓ではないという形状であり、ましてや團扇のような楕圓形や、日本の扇子のような折りたたみ式でもなく、便面に通じる形状であろうか。

- (10) 深津胤房「古代中國人の思想と生活―香りによる祓いについて―」『二松學舍大學東洋學研究所集刊第十五集』二松學舍大學東洋學研究所 一九八五年三月

- (11) 注6に同じ。

- (12) 張天恩「周代棺飾與銅簪淺識」北京大學考古學叢書『考古學研究』八、科學出版社二〇一一年六月

- (13) 「外棺蓋上放置石戈五件、北部一件鋒朝南、不帶銅片。餘四件内部均夾兩層長方形薄銅片、戈鋒一南一北相錯。内

## 中國詩文論叢 第三十七集

部和銅片相接外夾有薄木片。「認真查看報告的照片、顯然可以肯定所謂的長方形薄銅片就是銅翬無疑。其與他處墓地所見的一些翬體非常相似。而銅片所夾的所謂石戈、其實應是石圭。組合起來、就是一個長方形銅片上豎有圭形石器。」

(14) 注12に同じ。

(15) 魯瑞菁「馬王堆一號墓與砂子塘墓葬具之「璧翬」圖像研究」『靜宜中文學報 第一期』二〇一二年六月

(16) 翬は他には、馬車に乗る際に用いられ、羽で作られ風やほこりをさけるものと説明されている。『太平御覽』卷七〇二服用・扇に所引の崔豹『古今注』には

周制以爲皇后夫人車服、輦車有翬、則緝雉羽爲之、以障翬風塵也。

とある。同様の記述は『周禮』春官・巾車の

輦車、組輓、有翬、羽蓋。

の鄭玄の注にも

有翬、所以禦風塵。以羽作小蓋爲翬日也。

と書かれている。

また璧翬も他には鐘や磬を架ける棚の飾りであるとする記述もある。『禮記』明堂位に

夏后氏之龍簨虡、殷之崇牙、周之璧翬。

とあり、鄭玄の注には以下のようにあるからである。

簨虡、所以懸鍾磬也。横曰簨、飾之以鱗屬。植曰虡、飾之以羸屬、羽屬。簨以大版爲之、謂之業。殷又於龍上刻畫之爲重牙、以掛縣絃也。周又畫繪爲翬、戴以璧、

垂五采羽於其下、樹於簨之角上、飾彌多也。

更にここに孔穎達が「正義」で

周又畫繪爲翬、戴以璧者、翬、扇也。言周畫繪爲翬、戴小璧於扇之上。

と疏をつけている。翬は扇のことで、鍾や磬の樂器にかけておくかざりであり、畫を描き、上には璧を載せ、下には五色の羽をたらすとある。